

# 近代英語協会第41回大会

## —— シンポジウム・研究発表・講演 ——

開催日：2024年6月22日（土）

会場：日本大学文理学部

近代英語協会事務局分室

〒154-8513 東京都世田谷区下馬 3-34-1

日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科

秋葉倫史 研究室内

メールアドレス：akiha.tomofumi@nihon-u.ac.jp

協会ホームページ <http://www.modernenglish.jp/index.html>

(TEL 03-6453-1714 会費振込口座 00810-9-5821)

## 「初期近代英語期におけるスペリング」

司会：	堀田隆一	(慶應義塾大学教授)
講師：	菊地翔太	(専修大学准教授)
講師：	寺澤志帆	(慶應義塾大学大学院生)
講師：	堀田隆一	(慶應義塾大学教授)
講師：	山口美知代	(京都府立大学教授)

### シンポジウム趣意

慶應義塾大学教授 堀田隆一

初期近代英語期（1500-1700年）は、英語スペリング史において、現代に直接つながる標準化が緩慢に進行していた時代として重要な位置を占める。スペリングとその標準化の観点からこの時代を眺めると、印刷術の普及、ルネサンスによる文芸の隆盛、正音学者の登場、ラテン語綴字を模した語源的綴字、大母音推移の進行など注目すべき現象は多い。

これまでも同時代のスペリング研究はなされてきた。しかし、近年 EEBO (= Early English Books Online) をはじめとする各種の歴史的なコーパスやデータベースが登場したことで研究環境は大きく変わってきており、それに応じて新たな量的・質的研究への道が開けてきた。

本シンポジウムでは、まず前半の2つの発表で、「語源的綴字」を含む具体的な事例を取り上げながらツールとしての EEBO に注目する。事例研究を通じて EEBO の異なる版の各々の特徴を明らかにし、今後の初期近代英語期のスペリング研究を進展させるための基盤を整える。

続いて後半の2つの発表では、英語スペリング史における初期近代英語期の位置づけを浮き彫りにすべく、先行する後期中英語期から数詞のスペリングの揺れに関する事例研究を提示し、後続する後期近代英語期との関わりで音声学者による表音的綴字改革の活動に注目する。本シンポジウムが初期近代英語期のスペリング研究に新たな刺激となれば幸いである。

## 「EEBO-TCP を用いた初期近代英語のスペリング研究の可能性」

専修大学准教授 菊地翔太

Early English Books Online - Text Creation Partnership (EEBO-TCP) は、初期近代英語期の印刷本のデータベースである Early English Books Online (EEBO) を手作業で書き起こして作成された大規模な電子テキストのコレクションである。2015 年に Phase I (約 25,000 作品) が公開されて以来、初期近代英語の諸相について従来よりも大規模な量的研究が可能になり、研究の成果が次々と報告されている。現在、本家の EEBO-TCP およびそこから派生したデータベースやコーパスは、様々なインターフェースを通じて入手・利用できるが (e.g. ProQuest, University of Michigan Library Digital Collections, Oxford Text Archive, English-Corpora.org, CQPweb, EarlyPrint, Visualizing English Print (VEP) Project)、それぞれの特徴や使用上の注意点については十分に認知されているとはいえないだろう。

本発表では、初期近代英語のスペリングの諸問題を取り上げ、英語史研究における EEBO-TCP 系列のデータベースとコーパスの有用性について検討する。具体的には、まず各データベース・コーパスの特徴を整理し、次にパイロットスタディを通じてそれぞれの長所と問題点について掘り下げて議論する。

## 「EEBO を用いた語源連想綴字の普及の考察」

慶應義塾大学大学院生 寺澤志帆

*doubt* に含まれる <b> や *adventure* の <d> のように、ラテン語からフランス語を経由して英語に借用された語の綴字を、ラテン語の綴字を参照して直したものを一般に語源的綴字と呼ぶ。しかし、*advance* の <d> のように語源であるラテン語の綴字と一致しない綴字や、*island* の <s> のようにラテン語が語源でない綴字の変化も存在するため、本発表では語源的綴字の低位分類として、ラテン語を参照して変化したものを「語源参照綴字」、ラテン語と直接の関係がないものを「語源連想綴字」と呼び分けることとする。

語源参照綴字は 16 世紀に普及したとされているが、語源連想綴字の普及時期やその過程については明らかにされておらず、ラテン語接頭辞 *ad-* に関わる綴字をはじめ、語源参照綴字やラテン語からの借用語の影響を受けて、ラテン語と語源的に直接の関係がない語源連想綴字が普及した可能性が考えられる。本発表では ProQuest のインターフェースによる Early English Books Online (EEBO) ならびに EEBO-TCP のテキストを用いて、同じ書記素に関わる語源参照綴字と語源連想綴字の使用の推移を比較し、語源連想綴字の出現・普及と語源参照綴字との関係について考察する。また、綴字研究における、EEBO データベースからテキストをダウンロードして分析する利点と注意点について、特に English-Corpora.org のインターフェースによる EEBO コーパスと比較し、検討する。

## 「数詞のスペリングの揺れと標準化 — 後期中英語から初期近代英語へ」

慶應義塾大学教授 堀田隆一

後期中英語から初期近代英語にかけて、数詞のスペリングがいかに揺れを示しつつも標準化を指向していったかを記述する。一般にスペリング標準化の萌芽は 15 世紀前半とみられており、とりわけ “Chancery English” におけるスペリングに関心が寄せられてきた。しかし、Chancery English において高頻度語である数詞に注目するだけでも、スペリングの揺れ幅は決して小さくないことがわかる。例えば基数詞 “one” の異綴字として o, on, oo, oon, oone が、“two” には twayn, tweyn が、“three” には thre, þre が確認される。序数詞 “third” については thirde, thrid, thridde, thryd, þrydde などがみられる。このような揺れは、標準化の進んだ 15-16 世紀の間に、どの程度、いかにして収束していったのだろうか。本研究では、Chancery English から出発して同時期の資料に当たり、とりわけ 16 世紀以降は EEBO などを利用しながら、日常語である数詞に焦点を当て、近代スペリング標準化の前半期を跡づける。また、英語史上ほとんど取り上げられてこなかった序数詞 “ninth” の綴字をめぐる問題にも言及する。

## 「近代英語のスペリングと音声学の歴史」

京都府立大学教授 山口美知代

本発表では、近代英語の綴り字が標準化される過程の綴り字（改革）論において、音声学的考察が果たした役割について考察する。英語綴り字における文字と音の対応に関する表音的整合性は、時に語源的妥当性と相反するものでもあった。大母音推移が原因で発音と綴り字の乖離が大きくなった初期近代には、綴り字の表音性を巡る考察が活発になり、その考察こそが音声学の基礎を作った。たとえば、トマス・スミス (1513-77) やジョン・ハート (d. 1574) の綴り字に関する論考は、スミスが /l/, /m/, /n/ の音節化を認識したこと、ハートが me, he, she, we などの弱形を認識したことなど、音声学史的な貢献も大きかった。もちろんウィリアム・ブロッカー (c. 1531-1609) やリチャード・マルカスター (1530-611) の綴り字（改革）論も重要である。また、後期近代、とりわけ十九世紀の音声学は、音声表記体系の考案と密接に結びついた形での表音式綴り字の提案を重視していた。アレクサンダー・エリス (1814-90)、メルヴィル・ベル (1819-1905)、ヘンリー・スウィート (1845-1912) がその代表的な例である。英語の綴り字が表音原則だけで処理できないことについて音声学者たちがどのように折り合いをつけたのか、またはつけなかったのかを概観する。

## 1. 「初期近代英語期におけるトートロジー：使用法および現代理論との関連に着目して」

慶應義塾大学大学院生 青木輝

Boys are boys. のように, be 動詞を用いたコピュラ構造の前後に同一の語句が生起する表現をトートロジーと呼ぶ。トートロジーは, 一見すると無意味な表現がなぜ理解が可能なのかという点に着目が集まり, 現代では複数の理論が提唱されてきた (e.g. 藤田 1988)。一方でその歴史的な側面については, Wierzbicka(1987)が慣習的な解釈の存在の可能性を指摘しているにもかかわらず, *OED* に 1565 年の初出例の記載があることを除きほとんど知られていない。

こうした状況に鑑み, 本発表では, *OED* の記述からトートロジーの初出時期であると予想される初期近代英語に着目し, EEBO コーパスから収集された用例をもとにその含意について分析を行う。そこから, 現代の理論で指摘される解釈のプロセスの枠組みがいかに初期近代英語期のトートロジーにも適用が可能であるか指摘する。また同時に, 当時のトートロジーの使用法に着目し, それがどのように文学的・修辭的な役割を担っていたか, 分析を行う。

### 参考文献

藤田 知子 「Une Femme Est une Femme: X ÊTRE X 構文解釈の試み」 『フランス語学研究』  
22 号, 1988 年, 15-34 頁.

Wierzbicka, Anna. “Boys will be Boys: ‘Radical Semantics’ vs. ‘Radical Pragmatics’.” *Language*, vol. 63, 1987, pp. 95–114.

## 2. 「大母音推移(The Great Vowel Shift)についての新説」

静岡英和学院大学専任講師 石山久美

「大母音推移」について、これまでの研究を大別すると次の三点のような見解になる。第一は、その現象が歴史上ただ一度だけ中世英国で起きた、非常に特徴ある大きな発音の変化であったというもの。第二は、言語変化のメカニズムに規則がなく、母音変化が起こった事象は説明できても、どういった音韻変化の環境で推移したかという言語内分析としては、自由変化と結論付けられているもの。第三は、なぜこのような変化が起こったのかについては定説がないだけでなく、いつ始まったのかについてさえ意見は一致していないというもの。本研究においては、英語の母音がフランス語と同様に変化したものもあるが、逆に推移したものもあるという事実を指摘し、フランス語とは逆に推移した音については、フランス人支配に対抗するためにイギリス人が国家戦略として意図的に行ったのではないかという見解を論じる。

### 参考文献

Machan, Tim William (2012) Language contact and linguistic attitudes in the later middle ages. *The Oxford Handbook of the History of English*, Oxford University Press.

Millward, C. M., Mary Hayes (2012) *A Biography of the English Language*, Wadsworth, Cengage Learning.

Pryor, Felix (2003) *Elizabeth I: Her Life in Letters*, University of California Press.

ノールズ・ジェリー著、小野茂・小野恭子（訳）（1999）『文化史的にみた英語史』、開文社出版。

## 1. 「意味変化・構造変化の方向性についての一考察:動詞 promise と threaten を例に基本型から拡張型へ」

愛知淑徳大学講師 笠井俊宏

本発表では、意味変化と構造変化に関する変化の方向性についての一考察を動詞 promise と threaten を例に論じる。具体的には、プラスの意味を示す動詞 promise が基本型となって変化が生じ、その後にマイナスの意味を示す動詞 threaten へと変化が拡張していく可能性について論じる。Traugott (1997)では、動詞 promise と threaten は主観化による意味変化によりコントロール動詞から繰り上げ動詞へと変化することが観察されているが、発表者によるコーパス調査によると、後期近代英語において両動詞とも繰り上げ動詞の特徴を示す例が観察されるものの、現代英語においては動詞 promise には虚辞 there と共起する例が観察される一方で、動詞 threaten には観察されないことが分かった。このことより、同様の拡張が見られる滝沢 (2003, 2004)なども示唆する可能性についての考察も試みる。

### 主要参考文献

滝沢直宏 (2003) 「現代英語における SOV の語順: 基本型と拡張型」 『英語青年』 149 (8), 44-46.

滝沢直宏 (2004) 「周辺の構文を記述するためのコーパス利用-現代英語における SOV 構文を例に-」 『英語コーパス研究』 (11), 153-167.

Traugott, Elizabeth C. (1997) “Subjectification and the Development of Epistemic Meaning: the Case of *Promise and Threaten*,” in Swan, Toril and Westvik, Olaf J, eds., *Modality in Germanic Languages: Historical and Comparative Perspectives*, Mouton de Gruyter, Berlin, 185-210.

## 2. 「英語史における対格で具現化するデフォルト格の出現時期についての一考察」

中部大学講師 平田拓也

Schütze (2001)は統語で格付与されていない名詞・代名詞を統語以降の部門で具現化する際に用いられる格をデフォルト格と呼び、(1)などに基づき現代英語のデフォルト格は対格で具現化すると主張している。

(1) Her and us/\*She and we have been friends for ages. (Schütze (2001: 214))

現代英語のデフォルト格の研究は盛んに行われているが、管見の限りにおいては、英語史におけるデフォルト格に関する研究はほとんどない。そのため、英語史において対格で具現化するデフォルト格の出現時期は明らかになっていない。したがって、本発表の目的はこの時期を明らかにすることである。具体的には、(2)のようなコピュラ文に生起する対格代名詞はデフォルト格の具現化であると主張し、コーパス調査に基づき 15 世紀終わり頃に対格代名詞が生起するコピュラ文の初出例が観察されることを示し、対格で具現化するデフォルト格の出現時期は 15 世紀終わり頃であると主張する。この主張は近代英語期に(1)のような文が観察されるようになった事実(cf. 荒木・宇賀治(1984))からも支持されることを示す。

(2) I had to pretend I was him! (BNC)

### 参考文献

荒木一雄、宇賀治正朋 (1984) 『英語史 III A』大修館書店、東京。

Schütze, Carson (2001) “On the Nature of Default Case,” *Syntax* 4, 205-238.



「The Webster Bible: 綴り字改革者・愛国主義者による聖書改訂」

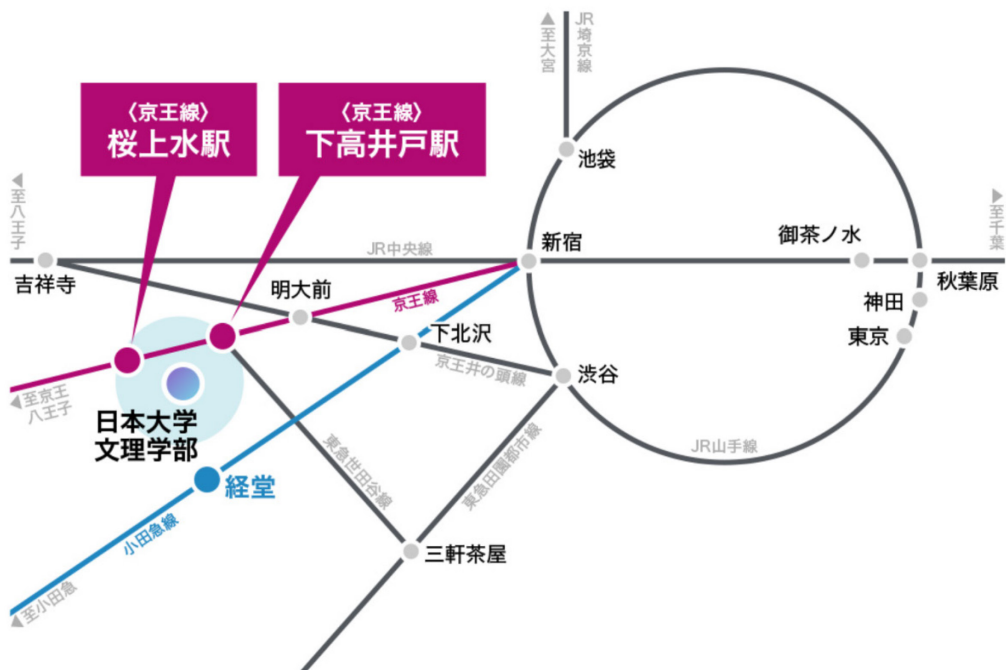
青山学院大学教授 寺澤盾

ノア・ウェブスターというと‘The Blue-Backed Speller’と称されたスペリング本や『アメリカ英語辞典』 (*An American Dictionary of the English Language*) を思い浮かべるのではないだろうか。後者で採用されている綴りがアメリカ式綴りとして一般的になり、このことがイギリスからの言語的自立を促し、愛国主義的な意識の高揚にも寄与したと言われる。一方、『アメリカ英語辞典』刊行の5年後の1833年、ウェブスターは『欽定訳聖書』(1611年)の改訂版を上梓しているが、この業績については従来等閑視されてきたきらいがある。

しかし、改訂聖書 (*The Holy Bible, containing the Old and New Testaments, in the Common Version. With Amendments of the Language*) の出版に際して、ウェブスターは‘I consider this emendation of the common version as the most important enterprise of my life.’と述べたと伝えられている。彼の聖書への関心の深さは、『アメリカ英語辞典』において『欽定訳聖書』からの引用がおおよそ6,000箇所にあふることにも伺える (これはサミュエル・ジョンソンの英語辞書に含まれる聖書引用よりも多い)。

本講演では、まず改訂聖書刊行以前のウェブスターについてその業績を中心に振り返り、それを踏まえた上で、綴り字改革者や愛国主義者としての彼の立場が聖書翻訳に影響を与えていたかという問題を考察していきたい。

【会場案内】





3号館4階

